第四章　敗軍の将は兵を語らず

「総理のイスにしがみつこうと得意の人事権を利用した防戦を展開しようとしましたが、封印されて結局退任することになりました」

例のテレビに総理の退任記者会見が流れる。それまでと打って変わってなめらかにしゃべっている。一日のワクチン接種が目標の百万回を超えて百五十万回になった時ぐらいしか自慢げに記者会見をするチャンスはなかった。それ以外はいつも下を向きながら具体的に説明することなく同じ形容詞を連結して訳の分からないことばかり言っていた総理が、すでに一時間近くもしゃべり続けている。

「こうした、ああした、とダラダラ言っているけれど言い訳にしか聞こえないなあ」

「敗軍の将は兵を語らずじゃ」

「ちょっと見苦しいな」

成果と言うにはほど遠い政策しか打ち出せなかったのに、さも大成功だったかのような語り口が続く。

「失敗に近いことばかりしていたのに、よくもまあ誇大に言えるもんじゃ」

「いいえ。はっきり言って失敗ばかりだった。対策は後手後手だったし、オリパラ弁当廃棄問

題のような不祥事には一切触れない。まあ辞めるんだから許してくれと言うことなのかなあ」

田中の容赦ない発言に大家も巻き込まれる。

「失敗は失敗。間違いは間違いと、きちんと謝罪すべきじゃ」

「でも政治家にそんな人はいないなあ」

田中と大家の声が届いたのか、ようやく会見が終わる。

「次は反省の弁かなあ」

と思いきや次の政権担当者へのアドバイスを始める。しかし、その内容も自己弁護に過ぎない内容だった。

「ひどい。政策のどこに問題があったのかを分析して対応策を説明してこそがアドバイスじゃ！」

田中も呆れかえる。

「よくもまあ長々と……そういえば今までの記者会見は短かったし、記者からの質問もそこそこにして会見を打ち切っていた。何故今頃能弁になったんだろう」

やっと記者からの質問を受け付ける。しかし、意外なことに退任する総理への質問は意外なほどやさしかった。

「山本さん！」

田中がテレビに向かって叫ぶ。

「おかしいな。いつもなら意味のない記者会見の中継などほどほどにして山本さんが鋭い論評をするのに」

「批評するまでもないのじゃろ」

質問内容が甘いこともあってついに反省の弁はなかった。総理の記者会見が終わるとようやく山本が現れる。

「少し長すぎたかしら」

大家がすぐ反応する。

「日頃の会見が短いだけに今回は異常じゃ。結局何を言いたかったのかよくわからん」

それがすべてという感じで山本が頷く。

＊

「ワクチンの普及ばかり強調していたけれど、感染は縮小するどころか拡大して医療が逼迫して死者も増えた。僕は、ワクチン接種に医師や看護師が引っ張られて治療や看護に当たる人数が減らされたことが原因じゃないかと思う」

田中の見解に山本が驚く。

「そのとおりだわ。私も含めて政府もマスコミも気づかなかった。いえ、少なくとも政府は気づいていたのかもしれませんが一切口にしなかった」

大家もすぐさま賛同する。

「確かに！　ワクチン接種の医師が足りないから歯科医や薬剤師にも接種させようとしたぐらいじゃ。当然医療現場にしわ寄せが行く。それを承知でワクチン至上主義を押し通した。その結果入院できずに自宅で亡くなる人が急増したのじゃ」

山本の手元に資料が滑り込む。目を通すとおもむろに解説を始める。

「先ほどの件、田中さんのおっしゃるとおりです。治療や診療に差し支えのない範囲でワクチン接種をすべきでした。あまりにも接種を急いだからワクチンの供給が逼迫して接種予約を受付できなくなりました。接種会場や医師の確保をした自治体や大学や企業にキャンセル料の支払いが発生しましたが、政府は供給不足に触れることもなくキャンセル料の補填は自治体などに押しつけました。しかも供給量の見込みを発表するどころか都道府県がワクチンを隠しているのではと疑いました」

「そうじゃった。都道府県からの猛反発にさすがの政府も取り下げたのう。いずれにしても急に雄弁になった総理はもちろん、総裁選立候補者もこの件についてまったく触れもせん。重大なミスに関わらず反省もせん」

「過去のミスはほおかむり。未来については大風呂敷……」

山本が苦笑しながら続ける。

「……衆院議員の任期がまもなく満了になります」

「あっ、そうか。選挙があるから不都合なことには触れない」

「でもじゃ。野党もこの点を指摘しない」
「随分前に野党は一度政権を取ったけれど三年も保たなかった。なんだかんだと言っても万年野党の方が楽なんじゃないのかなあ」
「今の野党の党首は当時官房長官じゃったが、いい加減じゃった。深刻な福島原発事故の状況説明などひどいもんじゃった。不都合なことはまったく公表しなかったぞ」
「都合が悪くなると沈黙する今の総理もいっしょか。反省しないと言うことは選挙のためだと考えれば合点がいくなあ」

＊

「結局本命が勝った。出来レースですね」
「すぐに選挙があるからどうなるか分からんが、新総裁は同じポストで歴代最長と言われる年寄りを首にすると言っていたが、果たして……」
山本がすぐさま最新の人事情報を披露する。
「まず副総理は留任です。もう八一歳ですよ」
「ポストと言う肩書きがないとただの議員に過ぎません。なんだかんだと言っても『人事』を握ることが最大関心事なのです。そして要職を渡り歩くことはそこでの仕事内容が分からなくても人脈という財産を手にできます」
「なるほど」

田中が無理矢理頷くと悲しそうな表情をする。
「僕なんか人脈にしてくれない。財産が欲しいなあ」
大家が首をかしげて田中を見つめる。
「国会議員は非正規社員と人脈を持とうとしますか？　大家さんのような大資産家なら『お近づきになりたい』と寄ってくるでしょうが」
大家は正直に答える。
「確かに。この間、町内会の民生委員からコロナウイルスに感染した妊婦がいるので市長になんとかならないか伝えてもらえないかという要望があった」
「当然引き受けたんでしょ」
田中が大家を促す。
「最終的にはな」
「どういう意味ですか」
「結局自宅で出産したのじゃが、母子とも亡くなってしもうたのじゃ」
「それなら知っている。マスコミも一斉に取り上げて誰もが悲しんだ事件だった」
「片っ端から市役所の窓口に掛け合ったが市長には会えなかった。重々伝えてくれるようにお願いをして帰ったが……」
大家の目から大粒の涙が流れる。山本ももらい泣きする。

「すでに母子は亡くなっていて、わしは結局『事後報告』のために市役所を駆け巡っていたことになったのじゃ」

第四章　敗軍の将は兵を語らず